



発行
NPO法人いわむら一斎塾
事務局 江戸城下町の館
〒509-7403
岐阜県恵那市岩村町317
TEL 0573-43-5087

一物の是非を見て、大体の是非を問わず。一時の利害に拘りて、久遠の利害を察せず。政を為すに此の如きは困危し。

言志録一八〇条

釈意

一つの事柄の善し悪しをよく見て、全体的視点よりその善し悪しを問題視せず。または一時的な利害にとらわれて、長期的な利害を視点としない。政治を司るにあたり、そのようなあり方は、国の危機的状態である。

今日的世相は、この訓えの如く目先のことに執着し、言葉上の将来であり、全体を把握せず、一時の損得に左右され、継続性のある利害を考慮しない。まさに私利私欲にとらわれた物事への判断が、政治・経済・教育・生活の全ての分野に蔓延り、世相は混迷まさに八方塞りである。国家として日本人社会の一大危機に直面しているのだ。だれの責任でもない日本人の全て、特に年長者から一人ひとりが良心に立ち戻り覚悟すべきである。

徳増省允

平洲先生、木曾路を下る

東海市立平洲記念館館長

立松 彰

上杉鷹山公の師として有名な儒学者細井平洲は、尾張藩に仕えたあと江戸と名古屋を行き来することが多くなりました。天明七年（一七八七年）六十歳のときに高弟の久留米藩士樺島石梁らを伴って尾張に行くときに、木曾路を辿り、旧知の木曾福島の関所の代官であった山村蘇門公を訪ねました。そのときの平洲からの漢文のお礼の手紙が、現在も木曾町の山村代官屋敷に掲げられています。その一節を、平洲研究者の小野重仔先生の『嚶鳴館遺稿注釈尾張編』（平成十二年東海市教育委員会）によって紹介しましょう。

既入門則倒履見延、坐定膝進、情緒無次。膳味具山海、而杯大如缸。……

既にして門に到れば則ち倒履し見延し、坐定まるや膝を進めて、

情緒に次無し。

やと御門に到着しますと、とるものもとりあえず、という風にお心を尽くしてお迎えいただき、部屋にはいつて席に座るや、膝をつき合わせて積もる思いを述べ、順序しだいもなく、心のおもむくままにお話することができました。

膳味具山海、而杯大如缸。……

膳味は山海を具して、杯の大なること缸の如し。

お膳には山海の珍味が並び、船のように大きい杯でありました。

臨去、又領佳贖一何鄭重、……

去るに臨みて、又佳贖を領せしむる、一に何ぞ鄭重なる。

お別れに当たりまして、更にその上に結構なお餞別まで頂戴してしまいまして、なんとという御念の入ったことかと、感激いたしました。

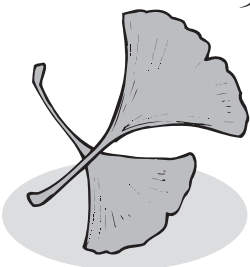
この礼状をおして、遠方より訪ねてこられた平洲先生を、蘇門公が心のこもった手厚いもてなしをされたようですが、ひしひしと伝わってきます。そして、

自辞而出、三宿達尾……
辞して出でてより、三宿して尾に達せり。

お屋敷を辞去してから、三泊して尾張名古屋に着きました、と。

小野先生は、この帰り道を、中仙道から分かれて恵那市檜ヶ根―同市武並町竹折―瑞浪市釜戸町―土岐市土岐津町高山―多治見市池田町―春日井市内津町、同市坂下町―同市勝川町と進む善光寺街道であつたらうと推測しています。

この年の十二月。蘇門公は尾張藩主の命によつて隠居して、関所の代官職を辞し、尾張藩の家老として名古屋で勤めることになりました。蘇門公の木曾領内における善政によつて尾張藩が招いたといわれています。その後、江戸詰めとなつた蘇門公は、江戸市ヶ谷の尾張藩邸に屋敷を与えられました。藩の御儒者である平洲先生もこの藩邸に屋敷を与えられていましたので、さらに深い交わりができたことでしょう。



「義は己にありて、万人にわたる」

豊田市鈴木正三顕彰会

事務局長 浜本晴之

「義は己にありて万人にわたる」これは佐藤一齋・細井平洲とともに東海の三先人といわれる仏教思想家鈴木正三が遺した言葉の一つである。

現在「豊田市鈴木正三顕彰会」では、本年度の顕彰活動のひとつとして「正三和尚金言集」を作成している。特に子どもたちにも理解できるものというねらいをもって、正三の数多い言葉の中から比較的容易なもの、あわせて宗教色が強くないものを選んでいく。

その表紙に前記の言葉を使用した。「義は人が誰でも持つていく良識のことであり、正しいこと、そうでないことを見分ける能力のことである。この、誰もが同じようにもつていける力を、人がお互いに磨き出し合っていけば、世の中はうまく整っていく。」正三全集の著者である神谷満雄先生のご指導を基に、こんな解説をつけた。この言葉は、正三「七部の書」の一つである「麓草分」の中に見えることができる。

鈴木正三は、天正七（一五七九）年三河国足助庄則定（現豊田市則

定町）で徳川家康の旗本鈴木重次の長子として生まれた。その後、関が原の戦い、大坂冬・夏の陣では徳川秀忠の旗下で武士として活躍した。しかし、幼い頃から人間の死や仏教に関心が強く、元和六（一六二〇）年四十二歳の時、突如武士を捨て出家してしまった。その後、故郷に帰った正三は人里はなれた山奥で荒行を極め、厳しい修行に基き、独自に開発した二王禅を始め、禅と念仏を中心とした特定宗派にとらわれない教えを提唱していった。

正三の偉大さをわずかな紙面に表現することは難しいことであるが、あえて取り上げてみると次のようになるのではないか。

その一つは、正三が武士を捨てて出家したというものの、他に多くの例が見られるような厭世的に俗世界を離れ、山野をさまようのではなく、生涯を通して求道心を貫き、教化活動に努めたこと。二つには、正三の目が特定の階級に向けられるのではなく、あらゆる人の日常生活に向けられていたことがあげられる。さらには、「念仏草子」や「二人比尼」など、分かりやすい文芸著作を発表し、庶民に対する教化に努めたことや既成の宗教活動に対する鋭い批判精神をもつていたことも忘れること

はできない。

正三を語る時、必ず、「世業即仏業」という言葉にぶつかる。「何れの事業も皆仏業なり」と説く正三の教えは、日本の近代資本主義の形成と発達を支えた人々の勤労観を職業倫理にまで高めるのに大きな力となった。世の中には様々な仕事があり、その何れもが私たちのためになつていく。私たちは、自分に与えられた仕事に「誠」の心をもつて取り組むことこそが何よりも大切である。こうした正三の教えを今の子どもたちにも伝えたくて、金言集の中に次の言葉も載せた。「農人なくして、世界の食物あるべからず。商人なくして、世界の自由成るべからず。」（万民徳用）



生前の姿をしのばせる正三像

第七回全国藩校サミット 「熊本大会」に参加して

会員 杉山伸美

去る六月二十一日、熊本市民会館大ホールにて肥後時習館顕彰会会長の開会宣言によって大会の幕が切つて降ろされました。参加藩校は北は庄内藩から南は薩摩藩まで二十二藩の関係者が会場狭しと多数参加されました。

大会会長が時習館の歴史と熊本城「築城四〇〇年」記念イベント等の紹介を混じえながら歓迎の挨拶をされました。

次に来賓の細川佳代子元総理大臣夫人、熊本県知事、熊本市長、徳川恒孝徳川宗家十八代当主、ほか旧藩主ご子孫の方々の挨拶がありました。

ついで基調講話「肥後時習館に見る人材育成」と題して文学博士の堤克彦先生が講演をされました。熊本県はかつて「肥後文教」また、「文教敬地」などの表現がありました。近世では第八代藩主の細川重賢が諸藩に先駆けて「宝暦改革」を実施し、従来の藩制度の抜本的な見直しを行いました。

「時習館は宝暦五（一七五五）年一月に開校され、細川重賢の目的は有能な藩士の育成と確保という『実利的な』人材教育」にあり、

運営はすべて初代教授秋山玉山に一任され、彼は開校に際して「孝経」を講じました。さらに「時習館学規」を定め、その教育と運営の指針としました。「時習館」教育では、幼少期から徹底した初期教育を行ってこそ、孝弟、忠信を修得した藩士の育成が可能であるとされていきました。

次に記念講演「江戸の徳育と平和教育」を徳川宗家が講演され「江戸末期には藩校二五〇校、寺子屋が全国に二万、江戸に四千あり、士農工商の身分制度により互いの理解と信頼感があり、二六〇年続いた。」と締めくくられました。

次いで、『秋山玉山』の漢詩について「斯文会理事長の石川忠久先生が講演され、『玉山』の六つの詩を紹介・解説され、中国詩人の五言絶句を詠われました。肥後時習会余話として、顕彰会会長の筑紫汎三様が述べられたことを報告し、まとめとします。

肥後時習会は細川重賢により、個性教育を教育哲学として「肥後論語・学面第一」を標語として決められました。この伝統は受け継がれ、明治になって済々黌から三人の漢学の碩学が生まれました。狩野直喜（京都大学教授）、宇野哲人（東京大学教授）、古城貞吉（東洋大学教授）。いづれも近現代の

日本儒学界の高峰で偉観であり、このような伝統教育を新時代にどのように生かすか。課題は「創新」にあります。と結んでおられます。私はこの熊本県の心意気に感動しました。

**一斎先生没後一五〇年祭を
迎えるに当たって**

副理事長 鈴木 木 隆 一

安政六（一八五九）年九月二十四日、一斎先生は幕府の学問所昌平黌の官舎で八十八歳の天寿を全うされました。

平成二十一（二〇〇九）年は没後一五〇年の節目を迎えます。

昨年から、東海市の市長さんが全国の各市へ呼びかけられ、それぞれの郷土の先人を活かしたまちづくり、人づくり、心そだてを進めている自治体が協力し合い、歴史を活かしたふるさとづくりを、「情報として全国に発信」して行こうとの狙いで、「嚶鳴（おうめい）フォーラム」が協議会として組織されています。

恵那市の可知市長さんもち早く手を挙げ、本年も近江聖人として地元はもとより多くの人たちから親しまれ崇められている中江藤樹先生のふるさと滋賀県高島市でのフォーラムにも出席して下さいました。

三回目を迎える来年のフォーラ

ムは、恵那市は勿論、東濃一円のご理解とご協力を得て、一斎先生没後一五〇年祭記念として、恵那市で開催することになりました。佐藤一斎顕彰会とNPO法人いわむら一斎塾が市と協働し、多くの関係団体のご支援をいただきながら、取り組んで行くこととなります。

すでに発起人会も開かれ、いよいよ実行委員会が組織され動き始めました。

大筋では、六月の名古屋市でのプレフォーラム、十月末の二日間にあたる恵那市でのフォーラムと第十三回言志祭く佐藤一斎まつりを核として、五月の東京湯島聖堂と九月の大阪大学中之島センタを借用しての「一斎塾」出張講座、岩村歴史資料館での特別企画展、書道公募展などが予定されていますが、実行委員会から更に恵那にふさわしい提案があるかもしれません。

フォーラムのテーマは、高島市の「未来を担う子どもたちのために、今、なすべきことは？」を受けて、大人の世代、とりわけ子どもたちに最も影響を与える「親学」に焦点を当てることになりそうです。

実のあるものにするために、皆様それぞれの立場で献身的なご協力をお願いします。

中江藤樹生誕四〇〇年祭「良知のこころに生きる」
嚶鳴フォーラムin高島に参加して
会員 小木曾 順務

去る9月27日、28日と二日間にわたり、一斎塾と顕彰会会員17名で、高島市海東市長の歓迎挨拶を受け、中江藤樹生誕四〇〇年祭嚶鳴フォーラムに参加した。初日は、郷土の先人をまちづくりに生かしている11の自治体から高島市長、恵那市可知市長をはじめ、二人の教育長が列席される中、童門冬二氏・吉田公平東洋大学教授をコメントーターに、「未来を担うこと、もたちのために、今、なすべきことは？」をメインテーマに市長サミットが行われ、各市から参加されている多くの参加者にとっても、意義深い討論を公聴することができたのではないだろうか？

二日目は、「嚶鳴フォーラムin高島」サミット宣言が、会場で読み上げられたのち、高島市長がコーディネーターとなり童門冬二氏・吉田公平氏の三人で「藤樹心学フォーラム」が開催され、藤樹先生から学ぶべく「孝」と「恕」を通して「未来を担うこと」もたちに伝えるものについて討論会が行われました。私自身、「おもいやりの大切さ」を改めて、学ばせていただきました。次年度にむけ、実りのある研修会でした。

学びあい、支えあう 「岩村知新塾」の 取り組み

一斎塾では、県の地域教育力再生運営協議会の委託を受け、町内各団体の協力を得て実行委員会を組織し、七月から「岩村知新塾」を実施しています。

これは、「社会の急激な変化に伴う住民同士の連帯感の欠如や人間関係の希薄化等による地域教育力の低下に対応するため、住民がボランティア活動や家族参加の体験活動、地域の様々な課題に取り組みながら解決する活動などを通じて、住民同士が『学びあい、支えあう』地域のきずなづくりを推進する」という趣旨のもと、市町村やNPO団体に委託して実施するものです。

歴史、文化、自然に恵まれた私たちの町には、他にない財産がたくさんあり、それを当然のように思っています。しかし、意外とその貴重な財産を正しく理解し、次世代へ伝えて行こうとする意識には、一部の人たちを除きやゝ乏しいように思えます。

「岩村知新塾」では、大人も子どもも共に学びあうなかから、郷土を愛する心と誇りをバトンタッチできたらと願いたいような活動

を行っています。

岩村城址能(薪能)の事前学習と観賞、重要伝統的建造物群保存地区の歴史的、文化的意義と防災学習、また、地区内のボランティアガイド養成学習、県重要無形民俗文化財指定の秋祭り(神輿渡御行列)学習と参加などです。

すでに半分以上の活動が終わっていますが、今後は「郷土の偉人から学ぶもの」とか、「江戸しぐさを学ぶ」などを実施する予定です。

いわむら

哲学喫茶



会員 井下賢一

土曜の昼下がり、気軽に入った喫茶店で少し知的な話がしてみたい。知らないことを聴いてみたい。自分の考えを話してみたい。

そんな思いを実現しようとする試みが「いわむら哲学喫茶」です。神戸で始まった『哲学カフェ』を参考に言志四録の城下町・岩村でこの五月から始めています。

物事の本質を自分たちで考える力を養うことを目的とし、十名程度の気さくな雰囲気の中、設定されたテーマについて易しい言葉で対話し、自分なりの答やヒントを『心のお土産』として持ち帰って

トピックス

- ◇第12回言志祭～佐藤一斎まつり～
 - *10月25日(土)
 - ・言志祭 午前10時 佐藤一斎銅像前他
 - ・記念講演会 午後1時半～ 岩村公民館二階
 - 演題「一斎先生『老いの戒め』～養生と身後の工夫」
 - 講師 近藤正則先生
 - ◇特別公開講座「いわむら一斎塾」
 - *11月22日(土)
 - 演題「下田歌子の生い立ちと人となり」
 - 講師 丸山幸太郎先生
 - *1月17日(土)
 - 演題「最も古くて最も新しいマナー(江戸しぐさ)」
 - 講師 沼田玲子先生
 - ◇第6回下田歌子賞
 - *11月30日(日)
 - ・表彰式 13時30分～
 - ・記念イベント 14時15分～
 - ・語り舞「源氏物語」
 - ・パネルディスカッション「下田歌子が語りかけるもの」
 - ・パネラーとして、童門冬二氏、実践女大湯浅学長などが登壇予定

あとがき

塾報第五号をお届けします。寄稿にご協力頂きました各先生方にはご多忙の中有難うございました。特別公開講座も回を重ねる毎に若い人の姿も見られ、幅広く徐々に皆様の琴線に触れ注目されつつある事を嬉しく思っております。

九月末高島嚶鳴フォーラムに参加させて頂きました。来年は佐藤一斎没後一五〇年祭を恵那市で行われる際にはお役に立ちたいと思います。今後共皆様のご協力よろしくお願い申し上げます。(喜)